



全国曹洞宗青年会の 活動紹介(六十)

災害復興支援活動 北信越管区研修会 報告

広報委員 南澤 亨全
みなみさわ こうぜん

令和六年六月二十六日(水)、石川県

輪島市の大本山總持寺祖院(以下、祖院)で災害復興支援活動 北信越管区研修会を開催しました。NPO法人災害救援レスキューアシストの川島浩義氏と炊き出しボランティア団体から講師をお迎えし、僧侶、寺族、臨済宗妙心寺派花園禅塾の方を含めた七五人が参加しました。

炊き出し研修では、講師二人の被災地での経験談を交えながら調理が行われました。被災地での開催ということもあり、炊き出し研修後に避難所へ赴き、炊き出しの配布をしました。島根県産仁多米の海苔弁、島根県産しじみ



汁、小松菜とツナのお浸し、人参しりしり、山形県産ブランド豚の生姜焼き、秋田県産いぶりがっこの計六品目を用意し、約四五〇食分を配布しました。

避難所生活が続くと野菜中心の炊き出しの方が嬉しいとの声が多く聞こえてくるそうです。できるだけ元の生活に近いメニューにしていこうといった心遣いが大事であると改めて実感しました。

午後には参加者で手分けをして祖院で復興支援活動を行いました。三松関のがれき撤去、大祖堂での清掃など境内整備を行い、一日でも早く通常の参拝ができるように一人一人が力を尽く

して行いました。

支援活動終了後、山門前で能登半島地震慰霊諷経を執り行いました。倉科俊浩北信越管区理事を導師として、震



災で亡くなられた方のご冥福をお祈りしました。祖院の高島弘成副監院老師は、挨拶の中で「当事者意識」をもつことの重要さを強調されました。

発災当初、避難所に身を寄せながらガスも電気もない中で炊き出しを始めたそうです。支援物資が来ず、食べるものもない中でとにかくあるもので賄おうと、カセットコンロ等を用い五日間調理をしたとのことでした。

このボランティア活動を通して被災地の皆さんと向き合っているということは、もしも自らが被災者となった場合に僧侶としてどういった対応や振る舞いができるかにつなが

がってくる、決して他人事と思わず明日は我が身だと思って行動してほしいと話をされました。

発災当初と比べ水道や

電気が復旧し、以前のような生活に戻りつつありますが、倒壊した住宅がそのまま残っているなど、復興はまだまだ道半ばの状況であると感じました。

被災者の避難生活が長期化する中で我々僧侶に何ができるか、被災された方々に思いを寄せるのと同時に、利他行の大事さや僧侶に求められる支援の形を改めて考えさせられる研修会となりました。

今後も全曹青を中心に「結集」して、今できる支援活動に全力で取り組んでいきたいと思っています。



● 執筆者プロフィール

南澤亨全

曹洞宗長野県第一青年会 所属